

〈資料〉

私説・北海道の児童文学史(一)

大 西 久 男

はじめに

北海道の児童文学の歴史に関しては、これまでも、二、三の出版物が刊行されていることは、すでにもう知られている。たとえば『北海道の児童文学』（にれの樹の会編・北海道新聞社・昭和54）や、北海道文学展（昭和41）にあわせて作成された冊子『北海道の児童文学』（加藤多一）がある。

このほかに、断片的に書かれたものも若干あるが、これらを通して戦前から戦後に至る北海道の児童文学の流れをつかむことが出来るわけで、ことに前者は資料的にも貴重なものであろう。前者のまえがきに述べられているように、「短期間にまとめようとしたことに調査不十分の点が多い……」とあるが、それにしても重要な資料である。

ことに和田義雄氏が分担執筆した「児童文学の夜明け」は資料的価値の高いものと言えよう。

さて、筆者がこれから記述しておきたいのは、筆者が直接、北海道の児童文学との関わりをもつようになってから
のことで、前述の出版物などにも、記述されていないことを可能な限り記憶の底から引き出してみたいと考えた。
年代からみると、昭和三十二、三年のあたりからと考えている。

直接関わったというのは、具体的に言えば筆者が日本児童文学者協会（以下児・文・協と略す）の会員に推薦されてから
のことに理解してほしい（但し現在は退会）。

このあたりのことについては、本文でふれることにする。

かといって、全く別のことを記述するわけではないから、前述の刊行物の内容と重複したり、あるいは筆者の記憶
違いということも避けられない。その点にご寛容の程を願うものである。

何せ三十年以上もむかしのことであるし、今のうちに記録に残さねばというおもいは強い。

また僅かな資料も散逸したり、また誰の記憶にも残らず忘れ去られてしまうと考えたのである。

さて、北海道の児童文学の流れを、陰と陽と二つの流れに分けて考えるとする。先にあげた『北海道の児童文学』
（にれの樹の会編）などは陽の部分——即ち陽の当る部分と言えるだろう。これから筆者が書き留めておきたいことは
陰の部分で、陽の当らない部分である。

陰と陽の二極に分けて考えること自体、おかしいことだと、誰でも思うだろうが、ただ便宜的に分けて考えるだけで、
項目の羅列に終わるのではなく、出来るだけ血の通ったものとして北海道の児童文学の流れの一面をとらえてみ

たいと考えるものである。

(一)

私が北海道の児童文学と直接関わりをもつようになったきっかけは、児文協の北海道講演会であったと記憶している。

一九五六年（昭和31）九月二十五日～十月四日の間、東京の本部（児文協）講師十名が三班に分かれて道内を巡回した。

その中の第一班（講師は坪田譲治、猪野省三、小林純一、岡本良雄）が、当時の北教組会館（今の北海道教育会館）で、主に札幌市内の教師を対象に講演をおこなった。

その頃、私は教師になったばかりの新米教師で、教室では作文の指導とか詩の指導に力をいれ、また童話を書かせたりしていた。

はじめて担任したクラスは小学校三年生であったが、その頃教育界では作文の指導、あるいはまた文学教育の面に強い関心が寄せられ、その実践も盛んになりつつあった。

児童文学においても、生活綴方（生活記録）や児童詩について発言が増えていた。

また作家の創作方法の問題などが論ぜられ、書き手として教師の活躍が注目されだした時期ではなかったかと思う

のである。

釧路の工藤専三郎、信州の加藤明治の名前が出ていたし、教師たちが児童文学にしびれを切らしたという意見さえもあった。

児文協道支部会員の鈴木規良が「日本児童文学・14号」に『うおの目』を発表し、地方会員の存在をアピールした頃であった。

私も子ども達に詩をつくらせていたが、私が頼りにするのは、すでに実際の指導をやっている先輩教師とか、研究図書ぐらいだった。

研究書も今になってみると、教師になってから間もなく出版された、久米井束著『教師のための児童詩教育』（河出書房）などが、私にとっては有用な指導書であった。

昭和三十二年八月十日、第四回全道作文教育研究大会が、小樽市の花園小学校を会場に開催された時、私ははじめて教育実践を発表する。研究発表『児童詩の指導について』であった。この時、私は多くの児童詩の実践者（教師）を知るのである。

また同じ年にまとめた論文『児童詩の指導から子どもの表現力を伸ばす』というのが、教育新潮賞を受賞したりして、新米教師の私は、子どもの表現活動ということに、積極的になっていたことは事実である。

そして私は子どもの詩をまとめた詩集『どんぐり』（ガリ版印刷）を三冊作り、四冊目は童話集『どんぐりの実』だった。

子ども達に童話を作らせたりしたのは、読書指導のひとつとして出てきたことで、書く力を伸ばすというねらいであり、童話を作るという目的ではないのである。

この作品集のことが、新聞に大きく出たり、作品が新聞に載ったりしたため、自分としてはこの先はどう進めていくのがよいのか、迷路に踏みこんだような気持ちであった。

正直なところ困ったなあ、という感じであった。

自分自身は学生時代から下手な詩を書いていたから、子どもに詩をつくらせることは、自然な成りゆきだったかも知れない。

しかし、子どもに童話を作らせることは問題はないのだろうか。新米教師の私も、はつきりとした自覚を持てないでいた。

前にもふれたように、詩も童話も自由に表現できる力を伸ばすことを大切にするために指導するのだ、ということぐらいにしか考えていなかった。

そんなとき、児童文学の専門家の講演会があるということを知った。

この講演会は道内では二回目、第一回目は昭和二十七年に開催されたことも知った。

私が小学校教師になって、子どもに詩や童話を作らせていた頃、小学校の物置小屋の中には処分しようとする新聞や雑誌類が積まれていた。その中から破損してしまった北海道児童文学会編『つららの笛』（昭23）と和田義雄著『白い劇場』（昭24）の二冊を見つけた。

その二冊は補修し今も大切に蔵書として、書棚におさまっている。

ちょうどこんな時に、講演会があったのであるから、私にとっては絶好のタイミングであったといえよう。

私は期待をいだいて講演を聴いた。講演が終了し、講師の先生に何か質問はないか、という司会者の言葉に、私は恐る恐る手を挙げた。司会者はあとで知ったのであるが、北大教授の斎藤秋男先生であった。

この講演会での講師の話をテーマだけ記しておく。(この頃、私は講師も道支部の人も誰一人として知らなかった)。

マンガの問題 (和田徹三)

生活記録と児童文学 (猪野省三)

流行歌と子どもの歌 (小林純一)

子どもの友だちとしての作家の立場 (岡本良雄)

童話のつくり方 (坪田譲治)

さて手を挙げた私は「大変低級な質問なのですが」と発言したせいか、講師の先生方はニヤツと笑い、どうぞ何でもという感じであった。七十名程の出席者であったと聞いたが私は腹をくくったつもりで、

「私は今クラスの子どもたちに童話を作らせていますが、それについて何か教しえて下さい」と、質問内容は正確に覚えていないが、多分こんな質問であったと思う。

意見のやりとりが交わされたものの、結論として、岡本良雄氏は私に対し、子どもに童話を書かせることは間違いないか。というようなことを述べられた。

そのあと、他の講師からも発言があったがその内容は全く憶えていない。

そうしたら、否定的な意見を述べた岡本氏が、前の発言を訂正して再度意見を述べられた。「質問者の発言を勘違いして受けとっていた」というようなことで、訂正意見を述べられたと記憶しているが、その時の否定的な岡本良雄氏の発言で、考えこんでしまったため、岡本氏の再度の発言の内容を、残念にも記憶にとどめることができなかった。

私の変な質問が、実はあとで日本児童文学者協会（児文協）としては、へ新しい問題として、学校で子どもに童話を書かせる問題＜が提出されたとして、検討課題になったらしい。

講演会が終了して席を立つたら、私は主催者側の一人に呼び止められた。私はその人がどなたなのか、全く知らなかったが、その人が和田徹三氏だと、あとで知った。

和田徹三氏は私に「いい方法があるんですがね……」と言われた。多分詩や童話を書かせる指導の方法についてだろうと、ふと思ったものの、どんな応答をしたものか全く憶えていない。

私は和田徹三氏が有名な詩人で、また児童文学者であるということなど、全然知らない新米教師であった。

それから間もなく、私は日本児童文学者協会の会員に推薦されるのだが、私を会員に推して下さった推薦者がどなただったのか、また正確な推薦日も覚えていない。本部にでも問い合わせれば判るだろうが、退会している者にとつては、そんな気も起こらないから困ったものである。

児文協支部の方も、そんな記録などある訳はないと思うから確認もしない。

このことは、本部会員を退会しているから必然的に支部（北海道）の会員でないから同様のことである。

最近になって、私は個人が団体に所属した時、やめた時などの記録は個人がきちんと記録すべきだと気がついた。団体などを当にしているのは都合が悪いものだと思うようになった。

話は前後するが、講演会での司会をされた人が、斎藤秋男先生だとあとで知ったのだが名前は前から知っていた。中国の児童文学を日本の子どもたちに紹介した『ツバメの大旅行』（牧書店）や、『中国名作選』（金子書房）の著者であるということからである。

その後私は斎藤先生から、いろいろな面で指導を受けることになる。

児文協の会員に推薦されることは、先にふれたが、推薦される少し前であったと思うが、北海道新聞学芸部の神埜努という人から、突然手紙が来てびっくりした。全く未知の人である。

何ごとかと思って読むと、童話の依頼であった。どうして私に頼んできたのかわからなかった。でも、若い新米教師の私は、はりきって書いた。童話を書いて原稿料を頂いた最初であった。たしか新聞の子ども版だったか「小中学生欄」だったと記憶している。

掲載面の切り抜きが残っているが、掲載日を書いていない。当時の新聞を調べるとわかるのに、そのままである。

この原稿を新聞社に送って、掲載される間に私は児文協の会員になったことだけは、はっきり覚えている。

これ以来、私は神埜努氏を知るようになった。横道に入るが、私がクラークの直弟子で札幌農学校一期生の内田^{きよし}瀨の研究を、長年続けたが、神埜氏もまた、同じクラークの直弟子で内田瀨と植民地選定の大事業をおこなったコンビである柳本通義の生涯について研究を続け、昨年その成果を上梓されたが、私とは妙なめぐり合せのような気がする。

クラークの直弟子である柳本通義は、神埜努氏の奥さんの母方の大伯父にあたることだが、柳本通義の研究に打ちこんだ動機であることを知り、納得がいった。

じゃ私が内田瀨研究にのめりこんだ動機は何なのか。となるとこれも実は児文協の会員になったことから起きている。

話を戻すことにする。児文協の北海道支部の会合が開られ、私は恐る恐る出席した。

集まりのもたれた年月日など、全く覚えていないが、場所は和田義雄氏経営の喫茶店「サボイア」で、その時の記憶に残っている出席者は、和田徹三、藤沢健夫、和田義雄、玉川雄介の四氏ぐらいで、私と同じく会員になった蒲田順一の二人が紹介された。どんな話し合いがされたのかも全く覚えていない。

藤沢健夫氏は当時道新学芸部の次長でその後、いろいろ支えになって頂いた忘れられない人であった。亡くなる一年ぐらい前にも電話を頂き、藤沢さんがいつも行く店で久し振りに二人で紅茶を飲みながらある相談をもちかけられたことが忘れられない。

私と同じく紹介された蒲田順一氏は、北海道学校図書館の仕事に深くかわり、児童図書研究会を組織し、郷土学習用図書の研究と製作に精力的に活動していた。

昭和三十年頃は、北海道の開拓精神を子どもたちにふれさせるための郷土の伝記集のようなものはほとんどなかった。

そのため、蒲田氏は「北海道伝記文庫」全六巻の出版を出版社の共鳴を得てすすめていた。

その時私は第一巻に内田^{きよし}瀨について執筆を依頼されたのである。本は昭和三十三年に刊行されたが、私はそのあと内田瀨研究を本格的にやり続ける破目になった。私が児文協の会員にならなかったら、蒲田氏との交流はなかったかも知れない。蒲田氏はそのあと何年かして、児文協をさっさと退会してしまった。

児文協の会員であることの意味は、何なのか。ということに疑問をもったのか？

その後も、私は蒲田氏との関わりで『北海のむかし話』、『北海道の歴史物語』、『北海道の伝記』（日本標準発行）の執筆分担をする。これらの図書はどれも立派な作りの、子どものための本である。

「北海道伝記文庫」の第一巻『北の探検家たち』は私が分担執筆したから言うのではないが、当時の道内の子どもの図書出版として、注目すべきものと思われるのだが、既刊の北海道の児童文学について記述された刊行物には全く記述されていない。

子どもが読むということを考慮して製作された図書であったことに、私は敬意を表すものである。

北海道の児童文学史上、ひとつの示唆を与えるものではないかと思う。だが残念ながらこの伝記文庫は第一巻しか刊行されなかった。

この二年前、即ち昭和三十一年に児文協北海道支部（以下道支部と略す）の機関誌「樞」が創刊されている。

私は道支部の集まりに初めて出席した「サボイア」で、和田義雄氏にこの冊子をもらったように記憶している。

奥付には季刊とあり、発行人玉川雄介、編集人鈴木規良となっている。「樞」の会員名簿には、支部長和田徹三、事務局長玉川雄介となっている。道支部が発足した昭和二十七年二月十六日は、支部長和田徹三、事務局和田義雄（北

海道の児童文学」P 282)で和田義雄は事務局長とはなっていないが、それに当る役割りを果たしていたものと思われる。

この発足に合せて「児文協北海道支部ニュース第一号」が四月一日付で発行された。ニュースの編集発行人は和田義雄となっている。

このニュース第一号の資料紹介を、私は児童文学の雑誌「森の仲間」31号(平成5)でとりあげたが、間もなく児文協道支部の柴村紀代氏から電話があり、あの資料を北海道文学館に保存したいから欲しいと言ってきた。その資料は実は八森虎太郎氏が私に送ってくれたもので、理くつから言えば所有権は私の方である。

しかし、彼女は八森さんに了解をもらったとか言うので、私も個人で持っているよりも文学館あたりで保存しておいた方が、役に立つだろうと思い、柴村氏に送ったが、その後文学館からは何の連絡もない。普通ならば何らかの通知がある筈であるが……。

ついまた横道に入ってしまったが、道支部発足時は二人の和田氏が偶然にも、会の重要な席にあったことになる。同姓であるため、和田徹三氏は和田義雄氏と間違われて迷惑したことが再三あったらしい。

徹三氏は「北海道児童文学の展望——人とその仕事の紹介」(北海道学芸大学新聞・昭31・9・28)と題する一文を寄稿し、その中で迷惑話にふれている。なかなかの艶福者であった義雄氏は、ある事件で新聞をにぎわしたことがあった。その時同姓のため間違われたのであろう。この一文は、昭和30年初めころの道内の児童文学の状況がよくわかる資料でもある。そのせいもあったのか、「樺」発行の時には、事務局長は玉川雄介氏になったのかなあ、と考えた

りする。しかしこれはあくまでも邪推である。

徹三氏が先の一文を寄稿した少し前に、義雄氏は「戦後十年の本道児童文学界回顧」と題した一文を道教委公報に発表した。これもかなり詳しく人物と活動状況を書いている。

両者とも、内容を読んで気のつくことは、どちらも現場の教師の活躍が大変盛んであるということであった。

さて前述のように、私が初めて新聞に書いた童話の題が「ねこやなぎの教室」というもので今読むと冷や汗の出る思いだが、内容的には時期は春先なので、多分昭和三十二年の三月ごろに、児文協の会員になったのではないかと考えている。

当時の古い印刷物なども、ほとんど散逸して残っていないので、確認できない。

私は何度も引越しをしたため、人には「引越し魔」と言われたが、その度に古い印刷物などが消えてしまっている。

(二)

一九五八(昭33)年三月二十三日に、児文協道支部の総会が、前年の秋に北海道平和委員会が訪中代表団を組織した時の代表団の一人として参加した斎藤秋男氏の訪中報告を合せて開催された。場所は当時の富貴堂さんのご好意で四階ホールでおこなわれた。

総会において役員が投票によって選出され、支部長に斎藤秋男、事務局長渡辺ひろし(事業部兼任)、また各部の部

長は総務部比良信治、研究部佐々木利男、出版部大西久男と決定した。

実は私が北海道の児童文学と深く関わりをもつようになったのは、この総会で出版部の責任者の役目を負うことからはじまったのではないかと、今思うとそんな気がする。

児文協の会員になって一年後に、児文協道支部の大切な役割りを背負うことになる。

理由は若いだけである。力があるわけではない。若さだけの強みしかもっていないわけで記憶としては、はりきって走りまわった覚えが強い。この時の総会では、支部長と事務局長を選出し、数名の常任委員を支部長の委嘱で決められた。そして常任委員が各部を担当することになった。

この時の支部総会の委嘱により、四月十六日常任委員会において「支部規約」が作られた。規約は第一條から第十條によってできていて、支部会費は月百円であった。

斎藤秋男支部長になって、道支部の「月報」を出したのは、総会後の五月である。

月報第一号は、ガリ版印刷で、このガリ切りは私が勤務している学校の同僚にやってもらった。ガリ切りは特技みたいなもので、当時ガリ版印刷が普通で、活版印刷は金がかかるから手が出ない。「櫓」もタイプライターの印字によっている。

この年（昭和33）特記すべきことはあとで述べるが「作家と教師と親と子どもたち」による作品合評会を開催したことである。この合評会はその後続けられていく。

またこの時の支部総会では、すでに関係者によって準備がすすめられていた、石森延男著『コタンの口笛』の出版

記念会を、児文協道支部主催で、四月十三日午後六時より、札幌市産業会館（現在札幌市役所駐車場の場所ではないだろうか）において講談社札幌支社後援で開催することも報告された。

出版記念会の運営では、記念会準備委員として、入江好之、八森虎太郎、藤沢健夫、和田義雄のほかに斎藤秋男支部長、渡辺弘事務局長が当り、関係方面との交渉に当るなど大変多忙をきわめた。

記念会が始まる前は、午後二時から石森さんは『コタンの口笛』のサイン会の会場富貴堂に出かけ、続いて石森和男氏の墓所のある豊平のお寺へ出かけたり、石森さんも時間の合間を縫って行動しているという感じであった。記念会の定刻には大半の参加者がつめかけた。受付を担当した比良信治、相内晋、そして私の三人は忙しい目にあったことを、今も覚えている。

お祝いの言葉の中で、特に印象に残っているのは、更科源藏氏が『コタンの口笛』は、本屋がつけた題名は『雪しろ』であったとか、かつて自分の詩集に出版元はコタンという名を使わなかったというような言葉が印象に強く刻まれている。石森さんと劇作家の栗原一登氏が一緒に来札したが、栗原一登氏は酒を一斗飲むというので一登としたとか、そんな紹介もあったが、石森さんとは『咲きだす少年群』以来のコンビだと紹介された。

この記念会での石森さんの挨拶で、感銘を受けた言葉は、次のような内容のものであった。

児童文学を出版する出版社はなかなか無い。そのため児童文学者は苦しい生活に耐えていかなければならない。この間、東京である出版記念会が八百円の会費であったとき、ある児童文学の評論家はその会費が払えないので出席できなかった。それほど苦しい生活を児童文学者はしている。（略）というものであった。記念会のさいごに石森さんの

義兄にあたる岡藤良輔氏が身内の代表者としてお礼の言葉を述べられたが、岡藤氏について私が強い印象が残っていることは、後日（七月六日）私たちが『コタンの口笛』の合評会をやった時、出席していた岡藤良輔氏が、コタンの口笛の中に書かれている植物や樹々の名前など、自然界に自生しているものに対する知識は、石森さんはほとんど私から得ていますと、言われたことである。

そのように岡藤さんは植物に関する知識が豊富な方でした。高校の理科の先生をされたことがあると、聞いたように覚えている。

あとでふれるが、石森さんのこの時の来札目的はもう一つ。それは石森和夫歌碑の建立についての準備で、話し合いは順調に進んでいた。

記念会終了後、石森さんは翌日は釧路、次いで旭川、それから函館へと講演の旅を続けそのあと札幌へ戻られた。あれ程注目された『コタンの口笛』ではあるが、今はまた見直しとか再評価の声が一部に起きていることは別に、『コタンの口笛』出版当時の動きを思い起してみた次第である。

岡藤さんと話した時、コタンの口笛を読んで感じたことは、同じような部屋を次々とのぞくような感じだと、感想をもらしたら、岡藤さんもへわたしもそのように思いましたと言われたことが忘れられない。詳しい話し合いなどは、もう覚えていないが、そのことだけまだ覚えている。

月報第一号で、斎藤秋男支部長は、「子どものためによい文学を」と題し、子どものためによい文学を書きたい、あたえたい。という願いをもった人々の集団を『児童文学者の集り』と考えていると訴えている。

要は書き手（作家）と生かし手（教師や親）が読み手（子ども）と結びついて本当の仕事が実るのである。これを受けて、常任委員会では合評会開催を実現すべく検討したのである。

第一回の「作家と教師と親と子どもたち」による作品合評会は、昭和三十三年五月二十五日午後一時から富貴堂四階ホールで開催された。

この時の作品合評会の資料提供は、相内晋氏の「ちいさな探けん家」という作品で、司会は研究部長佐々木利男で、佐々木氏の慣れた司会上手は、感心するばかりであった。

この作品研究会は、珍しい企画であったことから、各方面に大変な反響があったようである。

第二回目は翌年（昭34）三月八日に札幌市立大通小学校を会場に開られた。

資料作品はこの時は多く、童話は「吹雪小僧」（井上三美）、「風呂番」（大西久男）、童謡は「地球を見た犬」「タロとジロよ」（渡辺ひろし）であった。

ちよつとあと戻りするが、昭和三十三年七月二十七日の午前九時半から札幌市藻岩山の山麓に石森延男氏の父の「石森和夫歌碑」が建立され、その記念式がおこなわれた。「われらが愛する北海道」という歌詞を知っている人はどのくらいいるだろうか。

とても暑い日だった。朝九時半の予定が十時頃はじめたように記憶している。

この記念式ではじめて海老名礼太氏と会った。それまで文通や文集の交換をしていたのであるが、顔を合せたことはなかったのであるが、その時の海老名先生の言葉は、「今までも何回も会っていたような感じだな」と言われたこと

が忘れられない。

これ以来、私は彼と急に接近することになり、海老名氏の詩誌『北方の詩』に参加し、やがて詩誌の原稿を、私が友人のタイプストに頼んで印字してもらい、その用紙を送り返すというようになった。話に熱中すると、口に泡をとばして語り出す程の話好きの彼も、どうしてか昭和三十七年頃だったと思うが、会議に出たまま、それっきり行方不明。全くどこに消えたのか、死んだものなのかわからない。

NHKからも海老名氏の行方を問い合わせる電話が、私の勤める学校に來たりした。

全く不思議な事件で、その後全く何の手がかりも見つかっていない。失踪なのか、何かに巻きこまれてしまったのか、いろいろ噂は流れたが、みな噂にすぎないことばかりであった。詩誌『北方の詩』も自然消滅で今でも私はこの詩誌を見ると、海老名氏を思い出す。

画家木田金次郎氏に、初めてお会いしたのもこの記念式であった。

記念式が終了し、帰る途中だったと思うが、幼児教育にたずさわっていた時の幼稚園日記『あした天気になあれ』の著者、新見文子さんの自宅へ、何人かの仲間がお邪魔した。

新見さんの自宅の二階からは、藻岩山の麓が一直線に見える。新見さんは、二階の窓から石森和男歌碑の方向を眺めながら、「ここから毎日眺めながら、石森先生の歌碑をお守りしますわ」とつぶやいた。

新見さんの自宅は電車通り（南19条西14丁目）にあったからである。

私が新見さんの『あした天気になあれ』に関心をもつて読んだ理由は、偶然に私が雑誌「教育評論」に昭和三十三

年四月号から、教育実践記録『一年生の四季』を一年間連載しはじめた時で、新見さんの本は同じ年の五月に出版され、内容は幼稚園の記録であることからである。

私のこの『一年生の四季』連載がきっかけで、そのあと、他の教育実践者の二年から六年生までの連載が一年ずつ続いたのである。

話が前後して恐縮だが、私が児文協の会員になったと思っている、その年の秋にも児文協本部の講演会が開催された。第三回目である。昭和三十二年九月の末で、山本和夫、与田準一、来栖良夫、酒井朝彦の四氏が講師として来道した。和田義雄さんがよく冗談に、本部の講演会を指して「本部の先生方の修学旅行だ」と言っていたのを、何回か聞いたが、当時の講師の諸先生的心情として北海道講演会は大変な仕事であったと思うがまた反面楽しみもあったと思う。

私はそれでいいのではないか、と思っていた。北海道講演会の開催は、児文協道支部が経費を負担することは、とても不可能であることは事実で、当然スポンサーというか、協力者を見つけないといけない。

昭和三十年代には五回開かれているが、どの時にも藤沢健夫、比良信治氏らの関係機関や立場を通して、それぞれの土地で講演や座談会をセットすることが出来たことを、忘れてはならないと思う。

第三回目の詳細は、酒井朝彦氏が「北海道講演紀行」(日本児童文学・27号)として報告している。

九月二十九日に札幌着。翌日四人の講師は二組に分れ、与田準一、来栖良夫の二人は釧路へ。山本和夫、酒井朝彦の二人は当別へ行ったのであるが、私は当別へ同道する予定であったが、勤務校の職員会議で不可能。ちょうど富樫

曾耄郎氏が同道された。

私は会議が終了し、大急ぎで当別の藤沢健夫氏の自宅へかけつけたが、講師先生方は当別から別の方面をまわられ、帰る時間がいつになるのかわからないので、私はしばらく待っていたが、あきらめて帰ったことを覚えている。

ついでに翌年（昭33）の講演会についてもふれておこう。第四回目の北海道講演会である。

講師は坪田譲治、小林純一、片岡並男の三氏で演題は「童話と人生」（坪田）、「流行歌と子どもの歌」（小林）、「子どもに本を読ませるには」（片岡）であった。来道の期日は十月三十日～十一月十一日であった。

講師の片岡並男氏からも十一月二十日付の礼状が届いているが、手紙の文面に「函館、青森、仙台と寄り道そして十五日東京へ帰りつきました……」と書かれている。

札幌では夜、座談会のような講演会のような形で集まりを開催した。場所は当時の「あかしや荘」で、今の北教組の教育会館の横の方にあった。現在、北海道立文学館の前にある「ホテル・アカシヤ」の前身に当る。

みんな椅子に坐り、円形をつくって向い合った形をとった。司会は私がつとめた。

この時、坪田譲治さんは私に名刺を渡した。名刺の裏には三角形を書いて、その三つの頂点に言葉が書いてあって、坪田さんの話のポイントが記されていた。その言葉はもう忘れてしまっただけ、思い出せないが、坪田さんの司会者に対する気づかいを感じ、私は胸に強く感じたことを忘れない。

講師の一行が帰京するため、札幌から汽車に乗ったが、夜だったと思う。肌寒かった。

坪田さんを見ると、オーバーを身につけていたが、小柄な坪田さんにはダブルダブした服装に見える。坪田さんは「貸

してくれたのはありがたいが、ちよつと大きくてね」と、ニヤツと笑われた。「先生、あたたかい方がいいですよ」と言うと、「風邪をひくよりましだね」そんな会話をふと思ひ出した。

寒い日だったので、誰かオーバーを坪田さんに着せたものと思つた。

第五回目の北海道講演会は昭和三十四年十月三日から十四日までの日程であつた。

この折の、旅行報告を講師の山本和夫氏が書いていたので、詳細はそれに譲る（「日本児童文学・第45号」）講師は山室静、山本和夫、岡本良雄の三氏で、札幌には夕方の汽車で着くので、私たち支部会員が迎えに出て待つていた。

和田義雄さんは、その頃流行していたスクーターにまたがって、さつそうとやって来た姿を憶えている。

汽車が着いて降りてきた講師の一人、山室静氏を、更科源蔵氏がさつさとどこかへ連れて行つてしまった。迎えに出ていた支部会員は口あんぐりの状態で、たまたま沢田誠一さんも駅に見えていた。その様子を見ていた沢田さんは更科さんの行動に腹を立てたのに違ひない。渡辺ひろしさんの話によれば、更科さんに文句を言つてやる、と言われたと、後で渡辺さんが私に話した。

山本和夫氏の報告を読むと、更科氏と堀辰雄氏の未亡人が一緒だったらしいが、堀辰雄未亡人がいたとは、気がつかなかつた。

山本氏の筆を借りれば「拉致される」という表現である。

ついでに書くが、山室静氏を札幌の一夜、古本屋をまわりたというので何軒か案内しそのあと、ある人と会うこ

とになっていたので、狸小路にあった「爐ばた」という炭焼きの酒房へ案内した。

会う人の名前を、今どうしても憶い出せないのだが、Aさんとしておく。実は戦後山室さんは信州の方に移り住み、そこで青年の教育に力を入れ、文学を含め教養を身につける指導に力を注いでおられた時期があった。

その時に、山室さんの学校（？）に入所した青年の一人が、Aさんの弟であったわけで弟さんは胸を患って他界してしまうが、山室さんが来札されるというので、弟のこともあって、話をお聞きしたいということから、私に相談をもちかけて来たことから、会うことになったという次第。Aさんは亡き弟の話を山室さんから聞いていた。

飲みながら山室さんが口にした言葉に「北欧のものをやる人が少なくてね。ぼくは辞典を引きながら訳するのが、とても楽しくて。どうかすると食事に行くのも面倒で、家の者に、おにぎりにして持つて来てもらったりすることもあってね……」

ご承知のように、山室さんは北欧文学の研究者、評論家としてすぐれた業績の持つ人である。この講演会はそんなことで、私たちにとっては忘れられない講演会である。

第五回目の北海道講演会がおこなわれた、昭和三十四年という年は、児文協道支部にとってはまた、重要な意味をもつ年であった。

それは道支部の作品集『原っぱ』が刊行されたことである。この作品集が出版されたいきさつについては、『北海道の児童文学』（にれの樹の会編、北海道新聞社、昭和54）に若干書いた（「北海道と児童文学とわたし」——坪田譲治さんからの電報——）ので、ここでの記述は避けることにする。

出版記念会が八月十日に阿部旅館でおこなわれたが、私は出席できなかったのが残念で仕方がなかった。この旅館は現在の興業銀行札幌支店の場所にあった。

戦後の北海道で、児童文学の作品集が出版されたのは、昭和二十三年七月に創立された北海道児童文学会という、児童文学に興味を持つ作家、詩人、教師などのグループが刊行した『つららの笛』で、執筆者は百田宗治、石森延男、木村不二男、高倉新一郎、川崎大治、和田徹三、更科源蔵などで三十名近い人が執筆している。

この団体は児童文学者協会とは直接関係のあるグループではないから、児文協道支部の作品集としては『原っぱ』が最初であった。出版の仕掛け人であり、会の出版部長であった私は、『原っぱ』の刊行で、ほんとうにほっとした思いは、多分誰にも分からないだろう。そのために当時の事務局長の渡辺さんには、大変ご苦勞をかけたことになる。

『原っぱ』に対する批評は、その一部を道支部機関誌「にれの木」六号に掲載した。

「にれの木」は最初、月報としていたが、三号から「にれの木」と名称をつけることにしたが、この「にれの木」の記事内容については、是非書き残さねばならないと思っている。

(三)

昭和三十四年は先に述べたように、重要な年であったが、もう一つ児文協道支部にとって恥部ともいえるある事件が突然表面化した。

それについて簡単にふれておくことにしたい。それは童画家四辻一郎氏（当時東京在住、故人）と児文協道支部、および道新東京総局の協議により、時計台にまつわる『七つの星の物語』の作品を会員から募集し、その中から七篇を道新東京総局で選び、その七篇が道新本社学芸部へ、四辻氏の插画とともに届けられ、三月五日から七回にわたって連載された。執筆者も七人ということになる。

ところが七回の連載が終了した間もなく、七篇の中の一編が盗作ではないか——いわゆる剽窃というわけである。この記事がほかの新聞に大きく載ったので、われわれは驚いて前後策に取り組んだのは当然。

その一篇を執筆した本人を呼び、状況を聞いた結果、本人も事実を認めた。全文を剽窃したわけではなかったものの、かなりの表現箇所を盗作したことになるを得ない、とわれわれも認めたわけであった。

昭和三十四年度の支部総会（昭34・4・26・場所南一西四・日之出会館）において、本人を除名処分としたという、何とも口惜しい事件であった。

剽窃された方の作品は、実は七篇を選んだ際に選考から落とされた人の友人の作品で、大分前に発表済の作品であったことが分り、どうもあと味の悪い印象が残ってしまった。いわば身内の中の争いみたいに、外部の人からは見えただけではないかと思っただけを憶えている。

決してキレイゴトだけで、物事は進むものではない。最初に書いたように、必らず一つの事象には陰と陽の部分が存在するのだ、ということ、私はこの事件で強く感じた。

この『七つの星の物語』で、私の作品が四回目に掲載された。題は「ヒメマスの名を求めて」だったが、実はこの

作品について、読者の声の欄に投書が二通か三通出て、私はびっくりした。道新の学芸部からも連絡があったりして、私は早速、読者の声の欄に返答を書いた。

ヒメマスという言葉を使ったため、誤解を生じたのであった。明治十五年二月に、内田瀨が開拓使に提出した『巡回復命書』にカバチップと呼ぶ小魚にふれて記していることから、史実にフィクションをとり入れたため誤解が生じたのであった。私はこの時ほど、物書きのきびしさを強く感じたことはなかった。

投書された人は魚の専門家であったから、当然疑問に思うと気がついた。

この時、私は投書された人ではなく、新聞社にわざわざ出かけて行ったという、ある料理研究家とその後何回かお会いした。

その時は作品の関係ではなく、北海道の古い資料のことなどが主な話題であった。その人の名は「日吉良一」といった。もう故人であるが、私にすれば変った料理研究家だった。

こんな出会いもあったのが忘れられない。

この頃は、北海道の子どもたちのために、郷土学習の読み物を提供していこうという考えを持つ、マスコミの関係者も何人かおられた。

道新の『七つの星の物語』もその一つだと思うが、児文協道支部の枠組みにとらわれなくて、その方面に関心と興味を持つ研究者に執筆してもらおうという考え方を、マスコミ関係の人もいた。

たまたま当時の北海タイムスの担当者（小川猛氏）から話をもちかけられ、北海タイムス少年少女新聞に『北海道

の石碑物語』を連載することになった。私たちが住んでいる周囲に建っている古い石碑には、それぞれ悲しい、また美しい物語が秘められている。それを通して郷土の歴史を知るといふ企画の意図だった。

執筆者は私以外は郷土の歴史に深い知見をもつ人である。

担当者の名前を参考に揚げると、井黒弥太郎、築瀬秀司、蒲田順一、三浦迪彦、大西久男の五名である。

連載は(昭34・4・17から)二十二回で終了したが、大変評判がよく、本にしてほしいという声が、学校から寄せられたと、担当者が話していたが、企画の予定もあるだろうから、二十二回で終わったものの、機会があれば続きをやりたいと五人の執筆者は考えていた。

直接、児文協道支部の活動ではないものの、児童文学の立場から見れば、この連載なども児童文学の活動史の一部を担うに、ふさわしいものと思うので、あえて書き記すことにした。

なお新聞の連載といえば、この頃北海タイムスと児文協側の渡辺ひろし、海老名礼太、大西久男が話し合いをすすめていた『北海道子ども新風土記』の連載が、昭三十五年一月五日から週一回一年間にわたって書くことが決定した。挿画は四辻一郎氏で、北海タイムスの担当は文化部の小川猛氏であった。

連載は一月五日から始まり、十二月二十五日の五十一回で終了した。実はこのあともっと他のものを加えて、一冊になる分量になる程度に整えて、もちろん新聞に発表したものも、書き直したりして一冊にする準備をすすめた。

それを東京の児童図書出版社「さ・え・ら書房」から刊行される予定だった。

挿画の四辻氏が間に入って、いろいろ話し合いをすすめていたが、仲々うまく進展せずついに中止せざるを得なかった。

た。

今思うと、ちょっと残念なことだった。

〔当初、私たちの考えとして、この連載がはじまった五年前に、『北海道こども風土記』（北海タイムス文化部編、図書房）が出版されていたので、これとは違った新しい内容のものを盛りこんだ本にしたいと願っていたのであったが、それが果せなかったのである。〕

北海タイムスに前述のように連載中、私は出版部を担当していたこともあつて、会員の作品を別の形で一冊にしたいと考え、北海道の歴史童話の刊行を考え関係者と話し合いをしていた。最初発行年月日を昭和三十六年五月二十日とした。

また、編集は児文協道支部、発行を札幌市学校図書館協議会、出版社は北海道書房という所の予定で、それぞれと打ち合わせを続けた。学校図書館側と話し合つて、書名を歴史物語「北海道の夜あけ」（仮題）とすることろまで進んでいた。しかし出版社の方が具合が悪くなり、私は会員の原稿をとり返した。

このままでは、会員から集まった原稿が無駄になるので、何とかして本にしなければと考え、児文協会員でもある入江好之氏に相談をもちかけた。作品集『原っぱ』の時と同じように、また入江氏に相談をすることになる。ちょっと思い出したのでふれておきたいが、『原っぱ』が出版されたあと、坪谷京子氏は当時勤務していた大通小学校六年生に「読後感想アンケート」をとつて一覧表にまとめてくださったたり、また『原っぱ』の作品の挿画を桑園小学校の六年生にお願いしたのだが、その指導を荒木愛子先生がされたのだが、生徒の一人で〈相馬久美子〉さんという子ども

さんは、作品毎に感想を書いたノートを送ってくださった。そんな状況で『原っぱ』は世の中に出ていったのに、次の歴史童話はどうなるのか。私は心配になった。

とにかく原稿は手元にある、ということから、私は北書房を経営している入江好之さんを説得することになる。

歴史童話は出版される時は書名は『むかし話北海道』となるが、『原っぱ』と同様、この本の仕掛人は実は私で、ともすると入江さんが最初言い出した本人のように思われているが、それは誤りである。入江さんは出版を担当した立場であつた。そのあとの第二巻から五巻は入江さんが出版社の立場で企画をした。もちろん私たちは内容については当然協力する役目は果たしていた。まあこんな裏の役は表面に出ないものだから、知らないのが当然であろう。

こないきさつの中で、歴史童話出版について道支部の臨時総会が開かれた。昭和三十七年五月十日、午後五時からである。

歴史童話刊行について、私は今までの経過を説明、特に北海道書房からとり返した原稿が汚損しているので、書き直してもらうこと。また出版社は北書房にしたいことなど報告した。これに対しては、蒲田順一氏から図書館協会の立場から、いろいろな意見が出され、結果的に児文協道支部編、発行所北書房と決定したわけで、『むかし話北海道』と書名が決定したのは、臨時総会後の役員会（七月二十三日）であつた。

歴史童話集の出版について、入江好之氏と交渉していたころ、児文協道支部では役員の改選がおこなわれた（昭和37・2・25）。

支部長は玉川雄介（留任）、副支部長は長野京子、海老名礼太から、長野氏は留任で海老名氏に代って入江好之氏に。

海老名氏はこの頃行方不明になった事件の時期だったので交替したのかも知れない。

そして事務局長が渡辺ひろしと私が交替することになった。理由は私にもはっきり分からなかったように憶えている。

そして出版部は和田義雄氏と交替する。

事務局長という雑役の仕事がまわって来たことから、歴史童話集の出版には大変な苦勞を味わった。主に本の販売に精力を注いだ。

おかげで、この歴史童話集は評判よく、印刷部数二千冊はほとんど売れた。

評判がよかったので、版元の入江さんは次の第二巻の出版を企画し、それが第五巻まで続けたわけである。もつとも印税は全くなく、原稿料として本をもらった。

昭和三十七年二月二十日の総会で、事務局長が交替したことから、事務局の場所を北書房の入江好之氏の好意により、北書房の事務所がある「札幌市南三条西六丁目グランドビル三階301号室」に同居させてもらう。

児文教道支部では、昭和三十四、五年頃から、一水会（毎月第一水曜日）と三水会（毎月第三水曜日）という集まりを作った。

一水会は議題をもたない会合で、会員が集まって楽しい話題で交流を深めようというものであり、三水会は会員の作品研究会というべきもので、作品はそのたびに会員が交替に自分の作品を提供した。

この作品研究会は、既述したような「作家と教師と親と子ども達による合評会」とは別のもので、会員の書き手が

中心であった。

場所も市内のあちらこちらで開らいたが、一水会で最も多く使った所は、現在はもうないが北一条西三丁目仲通南向きに「サッポロホテル」というホテルがあつて、そのランチルームはよく集まりの場所になった、なつかしい場所である。その他市民会館、狸小路三丁目の明治製菓の二階、今はないが道庁前のパーラー・石田屋二階のスペシャルルームなどが記憶に残っている。

作品研究会（三水会）の資料が、手元にあまり残っていないので、全部をとりあげるとは今は無理であるが、分るものだけあげておく。

〈昭和34・7・6 於富貴堂四階ホール〉

・『コタンの口笛』合評会

〈昭和34・7・30 於明治製菓二階〉

・『まほうの鉦』（長野京子）

・『美しき声を』（工藤専三郎）

・『灯台の子』（渡辺ひろし）

・『ねばりんこ』（坪谷京子）

〈昭和34・12・13 於市民会館〉

・作品集『原っぱ』合評会

〈昭和35・2・17 於市民会館〉

・『さむいライオン』(加藤多一)

〈昭和35・3・23 於市民会館〉

・『カッカッコー』(神沢克一)

〈昭和35・4・20 於市民会館〉

・『とうげの上のくすりびん』(井上二美)

〈昭和35・5・18 於市民会館〉

・『切られた帽子』(大西久男)

〈昭和35・6・22 於市民会館〉

・『ぼつ当番』(黒川隆)

〈昭和35・7・20 於市民会館〉

・『源じいさんの「ドウ」』(井上貞行)

〈昭和35・8・19 於市民会館〉

・『鶴の声』(加藤明治)

以上記述したその後の研究会(三水会)の様子を物語る資料はほとんど見当たらず記録することが出来ない。今後の資料調査に期待するばかりである。

なお、今書き示した作品研究会の会場が、市民会館とあるが、これは市民会館内にあった札幌市文化団体連絡室である。また〈昭和34・7・30〉の明治製菓二階での作品研究会には、たまたま来道中の石森延男氏も出席され、石森さんを囲み、食事を共にしながらの作品合評会は楽しいものであった。

作品研究会（合評会）は、書き手が創作する方法について多くの示唆を受ける、大変貴重な場であったと、しみじみ当時を憶いおこすのである。研鑽する場面はいつの場合でも必要なことであろう。

(四)

記述が順不同で申しわけないが、児文協道支部機関誌『にれの木』に関して、その全体像やまた関係事項についてふれておきたい。

前述したが、機関紙『櫓』が創刊（昭31）されたが、創刊号だけで終わっている。

その前の児文協道支部が発足した昭和二十七年二月十六日付で、支部ニュース（会報）第一号が発行され、六号あたりまで発行したようだが、私は二号以後は目にしていないので、はっきりとは言えない。

その後、割合続いて発行されたのが、昭和三十三年の支部総会後からである。

前にもふれたが、第一号と二号は「月報」であったが、三号から『にれの木』という名称がついた。

第二号からはタイプ印刷になり、二号の内容で注目するものは、第一回の「作家と教師と親と子ども達による合評

会」の報告記事(坪谷京子・井上二美)であろう。特に目をひくことは、安藤美紀夫氏の活動ぶりが想像される。というのは、安藤氏はこの時は津別高校勤務で、忙しい中であつて、イタリア児童文学研究資料「G・E・ヌッチオ作・安藤訳「小鳥たちの王子」(1)(2)」を書いている。

当時、安藤美紀夫の存在は研究といい、創作活動といい、断然突出していたと言ってもよかつた。会員の作品も三篇(村尾・大西・井上)載っている。

次の月報三号の『にれの木』には、ヌッチオの「小さなギターひき」の訳文を掲載している。また渡辺ひろしが、木村不二男の童謡集「ニシパの祭」について書く。ほかに三号には作品が三篇(新見・関野・渡辺)が載っている。

第四号には会員の作品が四篇(井上貞行・沢田慶子・海老名礼太・大西久男)と、安藤美紀夫訳の「小さなギターひき」(二回)が載っている。ことに渡辺ひろしの「新美南吉の思い出」は今となつては貴重なものである。

「季信」と題した通信欄を載せた頁があり、その中に江別の坪松一郎氏の便りが載っている。へ……また具合が悪くてせつない務めつづけているのと、家がこわれてどうにもならなくなつたので、表記のところに引越したりして、ごたごたしてどなたにも不義理を重ねていました。狭い狭いマッチ箱みたいな家でモソモソやっています……とあり、目の前に坪松さんがいるようで、なつかしい。

五号は残念だが手元には見当たらない。内容も私は今は何ひとつ記憶していない。

六号は『原っぱ』の短評特集号として編んだ。支部会員の短評以外に、栗栖良雄、山本和夫、酒井朝彦、和田徹三、安藤美紀夫、小檜山奮男氏らの感想文、批評文が中心である。

七号は手元にないので、内容など不明である。何とかして探し出したい。

八号は、支部長が斎藤秋男氏から玉川雄介氏に交替した時に発行された。

この八号には会員の作品が三篇（黒川・速水・渡辺）載っている以外に、作品研究会の作品「カッカッコー」（神沢克一）も掲載されている。神沢氏の作品としては『原っぱ』の「かに」が印象的で、評判がよかった作品の一つだったと記憶している。

また活動としては、いつものように安藤美紀夫氏はイタリア児童文学研究資料を、編集の方に送ってくれていて、そのエネルギーと情熱に感激したことも忘れない。

この八号の編集は、編集を担当していた私の手によるものであるが、作品のほかにその時の児文協道支部の動きなどが分かり、状況の記憶などほとんど忘れていた私にしては、大変興味がある。

記事内容を紹介すると、先ず昭和三十五年度定例総会（昭35・2・21）の案内と、昭和三十四年度事業報告が載っている。

事業報告によつて、この時の児文協道支部の活動が浮かび上る。若干内容を掲げてみることにする。すでに記述した事柄もあるが、各部毎にあげてみよう。

〈研究部〉

- ・作家と教師と親と子どもによる作品合評会（昭34・3・8・大通小）
- ・作品集『原っぱ』合評会（昭34・12・13・市民会館）

- ・作品研究会(三水会)(昭35・2・17)

〈出版部〉

- ・『にれの木』総会特集号(昭34・4・26発行)
- ・『にれの木』六号、「原っぱ」短評集(昭34・9・4発行)
- ・『にれの木』七号、作品研究会資料と原っぱ短評集(昭35・2・5発行)

〈事業部〉

- ・子どもの心を豊かにする北海道講演会(昭34・10・3～10・14)講師・山室静、岡本良雄
- ・片岡並男講演会(二回)

- (昭34・8・18 道支部会員と会友懇談)

- (昭35・1・10～1・13・当別と札幌)

- ・『北海道こども新風土記』北海タイムス

(毎週土曜夕刊・少年少女版)連載開始・一月五日から一年間

- ・作品集『原っぱ』出版記念会(昭34・8・10 於阿部旅館)

以上のほかに、集会として常任委員会、三水会、総会準備会、原っぱ打ち合せ会のあったことが記録されている。

また第一回の北海道文化集会(昭34・12・5)が自治会館(現在のポールスター・札幌)ホールで開催され、われわれの支部も参加しなければならず、文化集会の公開討論のまとめ役に斎藤秋男氏、文化集會事務局長として入江好之

氏、会員劇への参加には渡辺ひろしと私が仕方なしに加わった覚えがある。この集会の会員劇に、別の会員劇があつて、記憶に間違いがなければ、道支部の長野京子さんが、俳人の寺田京子、宮田益子と三人で演じ、爆笑をおこしたことを、ふと思い出した。

また八号には児文協道支部規約の改正案が掲載されていることも、活動の指針を方向づけるものとして重要なことである。

さて、九号についてふれることにする。

この九号は、二つの特集を組んだ。〈特集Ⅰ〉は、玉川雄介さんの『コールの町のチップ』出版に関する感想や意見など坪田譲治、塚原健二郎、川崎大治氏ら在京の児童文学作家たちの文、道内では長見義三、木曾義正、斎藤秋男氏らの文を収録した。加藤多一氏の「勘チップ」の新しさという評論は考えさせられる内容である。

〈特集Ⅱ〉は、作品研究会の歩みについて、神沢克一、長野京子、加藤多一の三名がそれぞれ論評をし、研究会の充実を推進する意欲が感じられる。

会員会友の作品は三篇（浦聖子、渡辺ひろし、渡辺なつえ）であるが、渡辺ひろしの作品「藻岩光風園で」で憶い出したことがある。玉川さんの『コールの町のチップ』の出版記念会を藻岩下の光風園という所で開催した。会員会友が二十数名で玉川夫妻を囲み、ビールとジンギス汗とで楽しく語り合った。

もう今は住宅がぎっしりで、住所も川沿地区になって、どこだったかはつきりしない。

この記念会の途中、事務局長として活躍していた渡辺さんが、玉川さんをその年度の北海道文化賞の候補者に推薦

を図り、推薦文を読む途中、感激のあまり涙声になったため、和田義雄氏が代って読みあげた場面があったのも忘れられない。

次に十号ならびに十一号についてふれておこう。

十号は作品二篇で、森一男「エリモ大菩薩」という歴史童話、もう一篇は浦聖子「しいちゃん」である。森一男氏はこの頃『コロポックルの橋』が出たあとで注目を集めていた。

浦さんは私の記憶では昭和三十三年頃新聞に載った〈三年続いたハガキ童話〉という記事で、熊牛小学校という十勝の清水町から遠く離れた辺地の子どもに「えんぴつ太郎」と題したハガキ一枚の童話を毎週必らず送り続け、三年間続けた一無名女性が浦聖子さん。そういうことから注目した私が浦さんを仲間にひき入れたのではなかったかと思っている。その後の浦さんは、すばらしい作品を発表している。

十一号で目につくことは、海外（ロシア）の児童文学作品の紹介を精力的にやっている小檜山奮男氏である。道支部で海外作品の紹介を続ける人物は安藤美紀夫氏と小檜山奮男氏の二人で、十一号に、H・ノーソフの「とんだおもいつき」を発表している。

昭和三十年の初めころまで、児童文学の貧困ということが言われていたが、三十年代の後半になってからは、こうした危機説も薄らいできた傾向になったのではないか。

さて、『にれの木』は十二号から編集を和田義雄氏と交替する。私が総会でなぜか事務局長に指名されたためである。北海道の児童文学の動きを考える場合、児文協道支部だけがその役割を負っているわけではない。当然他のグルー

プや、時には個人としての活動などが大きく影響をもたらしている。次回はこれら他のグループや個人としての活動状況なども視野に入れて考えてみたいと思っている。(以下次号)